

鎌倉ローンテニス俱楽部発足と鎌倉文士

越智和夫



俱楽部100年にむけて

特集にあたり

当俱楽部は2024年に100年を迎えます。今年は大勢の人たちが俱楽部員として入りました。また、現在の俱楽部員の多くはここ2000年以降に入られた方が多く今会報では俱楽部発足の経緯と、戦前の鎌倉文士の当俱楽部での活躍を掲載しました。長い歴史の俱楽部文化と伝統に触れてください。

鎌倉ローンテニス俱楽部の発足

1985年第一回会報「クラブ略史」　元会長　三井再男著

当俱楽部は、東京ローンテニス俱楽部、横浜インターナショナルテニスクラブに次いで、庭球クラブとしては少なくとも関東では3番目に古い。また前二者は外国人の設立されたものなので、日本人のみによって設立されたPublic Clubとしては関東で初めてであり、恐らく日本全国において最も古いものと思われる。

鎌倉海濱院、鎌倉海濱院ホテルは明治20年サナトリウム「鎌倉海濱院」を開設。療養のため入院した患者に対し、海水浴(潮湯浴)を中心に厳密に計画された日課によって運動(散策)食事、休養を規則正しく継続することを求めた。

翌年、保養滞在型の西洋式ホテル「鎌倉海濱院ホテル」として開業。以後、鎌倉観光を軸に食事、テニス、ミニゴルフ、ヨット、釣り、子供専用の遊戯室も整えて利用客の増加に勤めた。高級リゾートホテルとして「湘南の帝国ホテル」とまで名聲を高めた。

大正9年頃、鎌倉海濱ホテルにコート一面があって、外人を含む宿泊客が利用していた。日本が初めて Davis Cup に参加した翌年の大正11年1月、このホテルコートで野村祐一氏らの企画で、清水善造氏の歓迎試

合が行われた。このころより長谷在住の野村氏は、鎌倉にテニスコートを造ることを念願し、鎌倉在住のテニス同好者と共にホテルマネージャーの香川氏に依頼して、コート二面をホテル敷地内に増設してもらった。

大正11年4月には野村祐一、平沼五郎、小泉信三諸氏の尽力により「内外人合同テニス大会」が開催され、新聞にも報道され関心を呼んだと書いてある。

大正11年7月、これらのコート三面で第1回鎌倉 Open and Handicap Tennis Tournament(鎌倉トーナメント)が横浜庭球協会の主催で開かれた。作家の久米正雄氏がムービーで撮影するなどして盛会であった。優勝者はシングルス野村氏、ダブルス野村・島岡組であった。

ここ「鎌倉海濱ホテル」と藤沢の「東屋」で鎌倉テニストーナメントが開催されるのである。

大正12年には第2回が開催され、Open では原田武一氏、Handicap では森氏が優勝した。

当時、テニスは high society のスポーツであり、鎌倉では個人の邸内コートも多く、山本条太郎、安川雄之助、中上川次郎吉、世古雄之助、森岡平右衛門他の諸氏の邸内にあった。一方、鎌倉在住のテニス同好者の間では、俱楽部を作ろうとする機運が強くなり、野村祐一氏らがそのための運動を行った。この結果、森岡平右衛門の個人のコート一面を借りられることとなり、ここに初めて鎌倉ローンテニス俱楽部が正式に発足したのである。大正13年のことであった。

場所は旧御成コート(現紀伊国屋)より南約150メートルあたりである。名称は湘南テニス俱楽部、会長は野村祐一氏、会計は草間時光氏(元鎌倉市長)、会費は月額2円であった。会員としては、里見淳、河津虎雄、小林国雄、内山雄治、橋本実斐、田中純、久米正雄、加納義雄の諸氏など約30名であった。

ところが大正14年、作家の田中純氏がビジターとして声楽家武岡鶴代氏を伴った所、その派手な服装(ブルーの上に赤のスカート)が森岡氏の逆鱗に触れて、コートの返還を申し渡されてしまった。非常に困ったが、石橋湛山氏らと相談して急遽資金を調達し、石橋湛山理事長の湘南社交俱楽部(一種の生活消費組合)の庭球部の形をとることになった。

その結果、昭和2~3年になり、湘南社交俱楽部の名で御成コートの土地を柳下達蔵氏より賃借することとなった。ところがこの土地は荒れた湿

地帯で、テニスコートらしくなったのは、銭洗弁天道へのトンネル工事に伴う掘土を盛って整地してからである。コートは3面、また風呂場を有する小さな建物を建てた。

昭和7年7月には、第10回鎌倉庭球トーナメントが鎌倉ローンテニス俱楽部の主催として初めて開催された。昭和9年10月には湘南社交俱楽部との関係もなくなり、俱楽部は名実ともに独立した。

昭和12年頃、熊谷一弥氏が入会された。Davis Cup Player の柏尾誠一郎、安倍民雄、山岸成一、山岸二郎、そのほか全日本選手権級の各選手が多数在籍した。この頃にはクラブハウスもベランダ付きの2階建に増改築した。

鎌倉文士と鎌倉ローンテニス俱楽部

鎌倉ペンクラブの初代会長として「鎌倉文士」の代表格とされる久米正雄(1891～1952)が実際に鎌倉に居住したのは関東大震災後の1925(大正10)年からだ。震災前から藤沢の東屋をよく気に入り利用して作品を執筆している。

東屋には2面の硬式テニスコートが設けられたが、久米正雄は常連プレイヤーとなり、写真も残っている。その当時としては数少ない硬球のテニスコート二面、敷地の一角に造り、………(鵠沼を語る会 渡部 瞽氏より)

長谷川欽一氏の文章に、鎌倉海濱ホテルのコートと両方を使って「鎌倉トーナメント」を開催、数多くの名士が出場され、私もその一員としてプレーした思い出がある………とあるのは、案外久米が鎌倉トーナメントの発起人かもしれない。

(鵠沼を巡る千一話 第0246話 久米正雄と東屋 より)

昭和9年7月に久米正雄の発案で「鎌倉カーニバル」が開催される。

これは、フランスのニースでのカーニバルを見たことがあり、鎌倉を単なる保養地でなく欧米並みの観光地として大きく抱き「鎌倉でのカーニバル」を発案したようだ。時代の困難さを打ち破ろうとする文学活動をやりながら、さかんにテニスに興じ、さらにテニストーナメントやカーニバルの開催など、文学者たちがこういうことで鎌倉を盛り上げていこうというのも、

武家の古い町と同時に、西洋文化、別荘文化を受け入れていった鎌倉の地なのではないか。

橋戸頑鐵 「鎌倉俱楽部の人々」

1933年(昭和8年) 雑誌「テニスファン」、より

鎌倉駅の裏手に三つのコートを持つ鎌倉テニス俱楽部のメンバー七十数人の中、もっとも多く占めるのは文士(新聞人も含む)でその他鐵道省の御役人、海軍士官、会社員、町會議員、実業家、学生と云つたように森羅万象の社会相をここに集めて賑やかなことは天下無比と云えよう、……。

“大佛次郎夫妻”

大佛次郎の熱心と精進ぶりは驚異に値する。普通ならば暁の夢まだまろやかなるべき六時と云うに、奥さんとご同伴で、例のもじやもじやした顔をコートに見せる、師範役は野村御大の後継者たる樺山君、技術は横なぐり一方の初心級だが、近頃メキメキと上手になりて、同じ流儀の小杉放庵老(洋画家でポプラクラブ)の墨をおびやかそうとしている。夫人もご主人以外の真似をしては、一足先に上手くなると困ると思ってか、これも横なぐり戦法で押し進む、但し力がないだけに却って球はコートの中に落ちる率が多い、まだコート上の夫婦喧嘩は見られないが若し噛み合つたら、今のどっちがどっちか判らぬとの下馬評、ただし夫君は不承知だろう、ダブルスの相手として人気のあるのは小林秀雄、今日出海の一対。

“小林と今”

大佛夫妻と対して兄たり難く弟たり難きこれ等兩人は、鎌倉俱楽部の一異彩と云えよう、小林秀雄はなまじ軟球の心得があるだけにドライブのかかった右で一本突込みたくて仕方がない、この点久米正雄の道楽に酷似するがいかんせん、意氣と力量とが伴わずして煩悶の日を重ねている。

今日出海氏は、平生のガチャガチャした性格に似合わず、コートに立つと、まるで違った性格の持ち主となる、そのおとなしいことと云つたら、これでこそ明大の講師様と云つてよからう、先日奥さんが見物に来て「あれが宿ですか」と疑つたことは嘘の様な話、すると「コートを御宅へ持つて行ってはどうですか」と傍にいた某が云つたそうである。

日出海のテニスは小林秀雄の様に野心満々でなく、至極克明に、おとなしく、力量相当の打ち方をしている、この境域を脱して少し打てる様になると、この男やかましくなるぜ。

“四州とメロン”

太田四州と云えば野球評者として有名な人であるが、近頃テニスに没頭して我輩を師と仰ぎ一生懸命な精進ぶりを続けている。この兩人は俱楽部での長老、メンバーの札を見ると四州が第一位、吾輩が第二位に置かれている。無論技量示すものではなく年齢順と知るべく、四州は六十に近いが、これ程老を知らぬ男はない。その証拠には、いくら疲れた時でも「太田さん一ちょう」と挑めば響の声に応する如く必ずイヤとは云わない、近頃は腕をメキメキとあげて、報知の照さんや国民の鷺田デブ君などの弟子を持つようになった。

四州の風貌に似て少し若くしたものは松田メロンである。彼は大船にメロン農場を有し、自家用のコートも持っている、さらに羨ましいことは、これも自家用の自動車で鎌倉に乗り付け、気に入った友人がいると大船へ拉致してウンとメロンを食べさせる、甚だ心がけの良い男である、テニスとしての腕は、昔農大の選手であったそうであるが、せいぜい四州に毛の生えた程度、コートで大声を発し、甚だ賑やかな点が四州に似ているので、ここに組み合わせて見た。

“純と鐵道子”

田中純は文士中の腕利き者、無論鎌倉俱楽部所属の同業者では群を抜いている。ボレーとサーブにおいて精度や凄みを欠くがフォアの正確なる点は先軍万馬の士たることを首背させる、但し元来無精な彼は、時々白髪を染めることを怠って登場し、友人をして悲哀を感じさせことがある、この頃奥さんの注意宜しきを得るせいか、かかる懸念の無いことは喜ぶべし。

純の好敵手に黒田鐵道子がある童顔をキヨロつかせて常に笑っている時分は堂々たるテニスを見せる、すべてが抜け目のないテニスで凄味はないが慈味は大いに鞠すべし。

いつも数人の弟子を連れて来場し、その都度種々の教訓を与えている、弟子諸君また惟々としてこれを拝聴する光景は誠に師弟の情緒溢れ、大いによろし。

純を左に、鐵道子を右にして戦わば、中老組として相当の価値あるべく、鎌倉俱楽部が有する誇りのペアと云うべし。

“多勢嬢と山村嬢”

早大で鳴らした多勢投手の令妹と山村嬢との一対は、万緑叢中に紅二点の感を与える、多勢嬢は米国に留学して声楽に秀でているがテニスは昨今から始めたもの、ただしその上達は著しく、男勝りの剛球で思いつきり歯切れのいいテニスをやってのける、体格が立派の上にこの気概があるので大いに奮励すれば将来は庭球会の人見嬢に成れよう、山村嬢は之に反して丁寧によく打ち一通りの要領をよく心得ている、試合をしたら多勢嬢には敵はない、先日ポプラの針重君が来て嬢はうまくなる素質があると云って褒めていた、大いにやるべしである、樺山師範シッカリ頼みますぞ。

“謙と前田”

三神敬長氏の子息、謙は湘南中学の五年生、蒲柳の質だが近頃メキメキと腕をあげて来た、もう少し本当に球がラケットに当たって来たら、将来は恐るべきものがあろう、相棒の前田もまた同様の進歩をしてきているが、謙に比して少しボレーが落ち、短気な所が災をする、四州頑鐵組を仮想敵として励精しているが、まだまだ勝てそうにない、仮想敵と云えば、四州は大佛次郎にも狙われていることをご存知あるか、「四州位には直ぐなれる」、次郎は老の寝首を搔こうとしているからご用心ご用心。

テニスは鎌倉文士にとって楽しい息抜きであり、社交の場でもあった。

大佛夫妻は、夫人酉子さんのほうがテニスが上手で、夫君はそれで嫌気がさしたらしく、途中で放棄してしまった。

橋戸頑鐵(信) 明治～昭和初期のアマチュア野球選手、
プロ野球の創設や都市対抗野球を開催し野球殿堂入り
新聞記者、野球評論家で鎌倉文士
太田四州 新聞記者、早慶戦(野球)の名文で有名な鎌倉文士